紹介

日記文學概說　玉井幸助著

本書は「日記文學概說の爲の基礎作業として、日記の全野を通觀し日記の本質を見極はめ」んと志されたもので、「日記文學は日記と呼ばれる廣汎な記錄の中に發生した作品であ」るとの著者の見解から先づ日記全般に亘る智識を準備しようとされたのである。從つてこの書名は單に著作動機を示すに止まり、內容は全く歷史記錄としての日記の研究である。その構成は先づ第一編に於いて「支那の日記」について概觀し、更に約五百五十に及ぶ日記につき時代的通觀並に分類的考察がなされてゐる。次に第二編に「我が國の日記」を取扱ひ、日記の本質を突くべく平安時代に於ける日記の用語例二百三を擧げて檢討を試み、「日記とは事實の記錄」との結論を得、尋いで日記の發生と展開、平安時代に於ける公私の日記と論を進めて、歌合等の日記に及び、更には鎌倉時代以後の日記の種々相についても筆を運んで居られるのである。かくて本書は著者も記された如く「著者の研究によつて明らかになつた事實の報告」と呼ぶべく、結論としては說文及び釋名にも「日實也」と云ふ如く日記は實記といふ一語に盡きよう。さればこの研究の意義如何は、實に結論よりは研究態度に存すると思ふのである。

顧るに歷史學者が常にその研究史料として日記の恩惠を多分に蒙りつゝ、しかも日記そのものに對する體系的な研究を發展せしめ得ずして、遂には他に重要なる研究目的を有せらるゝ國文學者をして、この勞作に實に十餘年の歲月を費さしめたことは全く遺憾といふ他はない。併し乍ら本書によつて報告せられた程度の事實で滿足されるならば、率直に言つて著者の研究はその目的から逸脫し迷路に陷られたとも言はれよう。それはこの報告が故和田英松博士の「日記に就いて」(國史國文の研究所收)の所論を踏襲し資料を添加して、これを擴大したものに過ぎないからである。私は著者が和田博士の所論を基礎とせられたことに贊成すると共に遂にそれ以上に發展せしめることなく、剩へ和田博士に對する一言の言及もなされなかつたことを更に遺憾とする。

しからば今後この方面の研究方向が奈邊にあるだらうか。日記は單に歷史的事實の證明として利用されるといふのみでなく、逆に歷史的社會の狀況が如何にそれに反映されるかを探求すべきである。例へは平安時代私日記の內容は「その中心は公の典禮儀式に關する詳細精細な記錄」でありつゝ、其間にも徐々ながら自己の見聞記述を含めつゝあつたが、遂には室町時代の日記に見る如き全くの個人的な見聞記述を主流とし、或は管見記或は看聞日記の如き書名さへ現はれるに至つた。かゝる記述心理の變遷は當代の社會生活の反映であり、歷史の研究上に於いてその過程を深く研究すべき課題であつて、同時にこの研究の一例の如きは日記の文學的作品と接觸する最も重要な一面を示すのであるまいか。日

記の研究、特に文學研究の基礎作業としては、その形式的分類よりも一層に內容的考察が必要であり、その點著者が平安時代の主なる私日記の數種に就いて內容を紹介せられたことは、一般讀者の爲の列擧とは云ひ乍ら意味を有する筈であるし、また歌合等の日記について原本との校訂を經た本文を收錄せられた如きは、やがて著者の研究目的に適切な回答を與へるであらう。

最後に第三編「皇國日記年表略」は支那日記年表と併せて本書の特徵となし得よう。これは室町時代の日記が有する意義を看却し皇紀二千年の如き研究上には無意味な下限を求められた點を重大なる缺陷としても、なほ今後の日記研究に相當の利用的價値を保つと思ふ。それはともあれこの著者がいはゞ門外といふべきかゝる尨大な基礎作業を企てられた熱意に對して、私は深甚なる敬意を表し、その上に立脚する「日記文學研究」の出版を鶴首して期待するものである。（A5版八〇三頁、昭和二十年六月目黑書店發行、定價貳拾圓）〔林屋辰三郎〕

ビスマルクの外交　時野谷常三郎著

故時野谷博士が逝去されて早くも四春秋を閱した。此の間祖國を戰禍の巷に化せしめた戰亂は學術研究さへ窒息させんとするに到つたが、戰が無慘な敗戰に終つた今日、こゝに故博士の學位論文が一卷に纏められて上梓されたるを見、感慨を新にする者唯に博士の講筵に連り博士の謦咳に接するを得た人々のみに留らないであらう。本書に繙きながら、博士最後の講義たる「ビスマルクの文化鬪爭」を聽講した評者の胸奧には、在りし日の博士の悠容迫らざる風貌と其の講義振りとが彷彿として浮び、改めて博士生前の面影を偲び追憶を新たにしたのであつた。

博士が獨逸近世史の大家として令名夙に高く、原博士が本書の序に述べられた如く「就中ビスマルク時代の研究の深い造詣は當代吾國の權威」と謳はれた事は、こゝに縷說するを要せぬ所である。我々は博士生前に於いて多數の述作に接するを得たが、今又博士が畢生の大作として心血を濺がれた學位論文が公開され、一般好學の士の机上に供せられた事は、獨り學界のみならず廣く我國文化の向上に資する所多大なるものありと言ふ可く、此の意味に於いて我々は、戰時下幾多の困難を排して本書の刊行に盡力された原博士に深謝す可きであると共に、原論文に見られた重複を改め用語假名遣ひの統一を圖る等出版の實務を擔當された中山三高教授の勞を大いに多としなければならない。

本書の構成は篇を分つ事六つ。先づ第一篇、ビスマルクの政治思想に於いて、十九世紀の指導的理念たる世界主義と民族主義とを說いて後ビスマルクの政治思想醸成に及ぼせる諸影響を明かにし、第二篇、ビスマルクの獨逸海權確立策と、シレスウヒ・ホルシュタイン問題に對するビスマルクの外交にては、シレスウヒ・ホルシュタイン問題をめぐり獨逸海上發展を圖るビスマルクの外交政策を扱ひ、第三篇、ビアリッツの會合とビスマルクの對佛蘭西政策、第四篇、ビスマルクの對伊太利政策と伊普同盟の成立ではそれぞれ對佛對伊政策を、第五篇、墺佛密約の成立とビスマルクの外交